

黄花

『山茶花』
86-1号

残す夕べ石路の黄花のかたはらに手許明るく庭の草抜く

マシユマロのごとき初冬の陽ざし背に朦朧と摺みどころなきわれ

目こぼしか存らへる躰の重たさ支ふるは己れよりほかなく

生きゆくは鬨ひに似て勝ち負けはいづれ慰めとわが裡にあり

諭すがに猫に言葉を残しつつ引き取られゆくは人ごとならず

公孫樹

『山茶花』
86-2号

晩秋の公孫樹並木に散る落葉往き帰りに踏むひそかな奢り

身の畢り何もて飾らむ冬の陽に柚子は黄こが金色に耀くものをね

向ひ風追ひ風を背にかやうに風は吹かうと孤独ひとりの力

幾度も脚立より足踏み外すひとりの自由独りの不自由

音立てて踏みし枯葉の心地よき今をしつかり生きる証し

木瓜

『山茶花』
86-3号

纏ふもの何もあらざる裸木はだかぎに恩寵のごとき朝の陽が射す

霜の朝木瓜はつぶらかに紅いろ冴えて今日のひと日の意欲をそそる

かすかなる怖れを抱くひとり身は刃を磨ぐことに日々手馴れし

か

幾日も言葉持たざる独り居よ誰か声きかせ昼のうつに

今日明日と思ひつゝるて手にせざりわが旅立ちの片道切符

落の臺

『山茶花』
86-4号

明日の身は推り知れずも今のいま支へくるる朝のブラック

問ひかけに忘ふる言葉の子グハグは自嘲ともつかぬこの虚しさよ

存らへる身の重たさの塵芥さ迷ひさまよひいづくに捨てむ
ちりあくた

おくるみに包まれしごとと落の臺いまだ稚く春なは寒し

父の許母へのもとへとこころ急くもて余しせる現なる身は

春の雪

『山茶花』
86-5号

堆く積もりし雪に朝の陽は冬を引きずり辛うじて早春

冬天の機嫌に触れしか降る雪にたそがれの暗き郷愁に似て

独り居の過不足なき平穩を套すがにとめどもなき春の雪降る

粉雪にまびれし吾れが夕暮のくりやに流す水音は潤ふ

木蓮の小指ほどなる苔もち鋭き意志を宙にかざせり

はこべら

『山茶花』
86-6号

くれなるのいたく小さき木瓜の花いろ褪あせずしてほのぼのと春

春なれば庭に蔓延るはこべらの花は今朝の慈悲として踏まず

散り際は潔きよきかな桜さくらばな花はな齡ながらふ吾れの愚かさ

存らへて恙なければしみじみと吾が倅の度合ひは目分量

月の夜を共に歩みて影ふたつひとつは生者ひとつは亡者

初夏

『山茶花』
86-7号

このあとは如何ばかり生きむ並木の径はすでに葉ざくら

春キヤベツこの齒ざはりの爽やかさ存らふ冥利これに尽きたり

庭樹々の眩きみどりの独り占め後ろめたさのわれのはつ夏

為すことの手許の狂ひにつくづくと老いの当然と自ら赦し

くりやべに立ちさて何を為さむと蛇口の水ひたすら流しして

五月のカレンダー

『山茶花』
86-8号

惜しみなくみどり滴る庭樹々にカレンダー緑らざればいつまでも

五月

まだわれは生きねばならぬ播き終へし種子袋に確かなる日付

草抜くと右往左往の蟻の群あしたの慈悲と踏まずあやめず

冷凍庫の何を取り出さむと立ちたるに自嘲ともつかぬ哀しさに
るる

訳ありの林檎あがなひ足りたれば斯く単純に老いゆく日々になる
て

梔子

『山茶花』
86-9号

身の整理いまだ手付かず無為の日日いつしか庭は雨季のあぢさる

足どりのたどたどしけれど梔子の香の届く距離までの歩みなり

みづからのその香に酔ひだる梔子は赴くままに揺れるる午後

梔子の残り香放つ花殻を老いの無聊に寄せ蒐めたり

夏空になんの罪科おじぎ草斯くもふかぶか頭こうべを垂らして

人との訣れ

『山茶花』
86-10号

朝々髪を整へ紅をさし如何なる終焉かすがしくあらむ
おわり

さるすべり紅く咲くとも尽きざる哀しみは人のひとりを喪ふ

夕風よひと一人との訣れなり樹々の葉擦れさへ哀しきものを

怠らず老いゆく日々よ爽竹桃の熾烈に赤き夏を煩ふ

野良猫に餌を与ふるながれとの御触にあらば水を蓄めおく

見下ろされ「バカア バカア」と鳴く鳥わが耳朶のみに触れくる朝

研ぎ終へし刃の試し切り南瓜に挑むほどの覇気もなき今は

朝々を刻むキヤベツの手捌きの哀へもよはひ齡かさねて知る歎き

自由なる独り身の不自由譬ふれば軋む雨戸の朝夕あの開け閉たて

生き難く死にがたくるるこの葛藤の日々を癒やせる朝々の珈琲

夕 茜

『山茶花』
86-12
号

暮れきらぬ庭の静けさ立ち枯れのカンナに伴せてわれの晩夏おそなつ

歩み来し野はすでに初秋あき招くがに八つ手は巨き葉広げてゐたり

柔らかに雲をつつむる夕茜ひとつ齡よはひを累ぬる明日

ひたすらに誘ふ睡魔ようとうとと夢かうつつかけぢめもあらぬ

不確な明日と思へどくりやべに朝餉の献立ひかへ置きたり